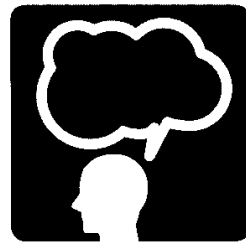


経営(継業)のツボ

理念



転期に立つ経営者の資質の鍛え方⑥

眼横鼻直

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやがわ・ひろし
経営コンサルタント。1991年に独立。
介護事業に関する独自の調査に基づ
いたデータ分析を各誌・紙に発表。著
書に『早川浩士の常在学場』(筒井書
房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、
『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企
画)、『データで徹底分析 介護事業の
最新動向と経営展望』(日本医療企画)
など。
<http://www.hayakawa-planning.com>
ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

◇当たり前のこと◇

鎌倉時代初期の禅僧で曹洞宗の開祖・道元は、24歳のとき、中国・南宋に渡って天童山の如浄(じゆん)禅師の下で修行して悟ったこと、それが「眼横鼻直」である。

眼は横に鼻は縦にあること。そのような当たり前のことを当たり前として知ること、とらえること、あるがままの姿勢を大切にすること。

たとえば、まっすぐなものはまっすぐに。曲がったものは曲がって見えるという、当たり前のことを当たり前の事実としてとらえてすべて肯定するという意がある。

禅寺では、米を研ぎご飯を炊き、おかずをつくるといった食事などを調べて供する賄い事を司る役僧を「典座」といって、大事な修行の一つと位置づけている。

賄い事は、日常の食事という意を含んだ「日常茶飯」に込められたありふれた事柄の一つひとつの繰り返しにすぎず、誰にでもできそうだと見られがちで雑用だけに手を抜くことなく、やり続けることに修行としての意味がある。

介護も同じだ。

典座の役割を担った職員は、決して少なくない。

誰かがやらねばならぬ賄い事も電子レンジがあればこと足りるといふ昨今の家庭環境にあつては、介護現場で包丁が使えないという人も決して珍しくはなくなった。

複数事業所連携事業で、包丁が苦手という職員が柿の皮むきを実践的に学ぶことができるよう干し柿づくりを提案したところ、多くの実践報告を得ることができた。干し柿をつくる手間を大事にするか否かは、トップの考え方にある。

◇当たり前を崩さないこと◇

二宮尊徳の道歌(教訓的な和歌)のなかにも、「眼横鼻直」に通じる一首がある。

米まけば、米草はえて米の花

咲きつつ、米の実る世の中

これは、稲の種をまけば稲の草を生じ、稲の花を開き、稲の実を結ぶという当たり前のことを詠んだものだが、ある原因はそれなりの結果を生じるといふ道理を説いたものでもある。

麦まけば、麦草はえて麦の花

咲きつつ、麦の実る世の中

稗まけば、稗草はえて稗の花

咲きつつ、稗の実る世の中
粟まけば、粟草はえて粟の花

咲きつつ、粟の実る世の中

豆まけば、豆草はえて豆の花

咲きつつ、豆の実る世の中

椎まけば、椎草はえて椎の花

咲きつつ、椎の実る世の中

櫻まけば、櫻草はえて櫻の花

咲きつつ、櫻の実る世の中

櫻まけば、櫻草はえて櫻の花

咲きつつ、櫻の実る世の中

などなど、100種類も続いていた最後は、

この歌をおかしく思う人あらば、

米の実まきて麦にしてみよ

と締めくくられている。

つまり、当たり前のことを当たり前前に実行して、当たり前を崩さないこと。それが大切なことである。

善まけば、善草はえて善の花

咲きつつ、善の実る世の中

悪まけば、悪草はえて悪の花

咲きつつ、悪の実る世の中

汚い、キツイ、危険の3Kと介護の仕事をとらえるか、それとも希望、工夫、感動へと置き換えているのだろうか。

トップの考え次第で、介護人財の育成も大きく変わる。